國學院大學伝統文化リサーチセンター「祭祀遺跡に見るモノと心」
平成 20 年度フォーラム　**伊豆の神仏と國學院の考古学**　発表資料集

神道考古学の形成と伊豆の祭祀遺跡
－大場磐雄の伊豆調査－

中　村　耕　作

2008 年 10 月 25 日
國學院大學伝統文化リサーチセンター「祭祀遺跡に見るモノと心」グループ

神道考古学の形成と伊豆の祭祀遺跡
－大場磐雄の伊豆調査－

中　村　耕　作
國學院大學伝統文化リサーチセンター

「この時春の陽も暮れかけて、夕陽が西に傾いた時、遺跡の西方に陽を背景にして兀然と私の眼底に映ったものは、三倉山の麗姿であった。三輪山に似た三角形の美しい小山、土地では吉佐美富士と称し、頂上に浅間社を奉祀するという。古代人が神の憑依すると考えた対象こそ、この山ではあるまいか。ここの祭祀遺跡はこの霊山を対象として行われた跡であろう。私はこの時一種の霊感に打たれたといっても過言ではなかった。私にはまだ残された仕事がある。古代祭祀址の研究こそ、その主眼となるべきではあるまいか、こんなことを思い立たせたのであった」（大場 1960b：243-244 頁）

第１図　三倉山遠景（1938 年　ob1165）

１．神道考古学の背景とその形成過程

國學院大學に考古学専攻を設置し、各時代にわたる調査を手がけてその基盤をつくりあげた大場磐雄は、一般に「神道考古学」の提唱者として知られている。主として石器時代を研究していた大場をこの分野に導いたのは、下田市吉佐美の洗田遺跡と、その前方に聳える三倉山［第１図］との運命的な出会いであったことは、前掲の大場自身の回想によって広く知られているところである。

大場は、旧制中学時代より鳥居龍蔵に人類学・考古学を、大学入学後は折口信夫に民俗学、内務省神社局に移ってからは上司である宮地直一から文献史・神社史を学ぶ。この間、考古学者としてあるいは社寺の宝物調査の専門家としての柴田常恵の知遇を得ている。当初、宗教思想研究など石器時代研究を中心としていたが、三倉山との出会いと前後して、内務省神社局考証課に移り、神社調査を職務とする傍ら、自らの中心課題である祭祀遺跡の研究を進め、1935（昭和 10）年に「神道考古学」を提唱し、論文集『神道考古学論攷』（1943）、学位論文「祭祀遺跡の研究」（1948a）をまとめた。学位取得の翌年、國學院大學教授に就任し、以後考古学専攻の設置などに尽力するとともに、長野県平出遺跡・千葉県菅生遺跡などの集落遺跡、長野県柴宮銅鐸、常陸鏡塚や大生古墳群などの古墳、方形周溝墓命名の契機となった東京都宇津木向原遺跡など各時代・幅広い分野にわたる遺跡の調査研究を進めた。一方、専門の「神道考古学」の成果は「神道考古学の体系」（1964）、『まつり』（1967）、『祭祀遺蹟－神道考古学の基礎的研究』（1970）に収められ、晩年には銅鐸や古墳、祭祀遺跡、式内社等の分布など多角的見地から古代氏族の動向に迫った『考古学上から見た古氏

		主要著作・伝記事項	伊豆調査
明 32	1899	東京市生まれ	
大７	1918	國學院大学入学、「玦様の石製品に就いて」	
大８	1919	郷土研究会幹事（この年、折口信夫講師着任）「武蔵の巨人民潭」	
大 11	1922	大學卒業・第二横浜中学校着任　「石器時代宗教思想の一端」	
大 13	1924	「諸磯式土器の研究」「国史教授と考古学」	
大 14	1925	内務省神社局考証課嘱託（課長宮地直一） 「日本石器時代における二大文化圏」	10・12：　伊豆大島行
大 15	1926	『神社と考古学』、**「大島人の信仰」**、**「伊豆大島の古代遺跡」**「土偶に関する二、三の考察」「土偶の社会学的考察」『民俗叢話』	
昭２	1927	**『石器時代の住居阯』「南豆に於ける特殊遺跡の研究」「伊豆半島の遺蹟遺物」**	3：南伊豆調査（見高・遠国嶼他）。4：熱海旅行（伊豆山調査）、4：南伊豆調査（見高・金草原・洗田他）、6：南伊豆調査（見高）、9：南伊豆旅行（報告書の贈呈）、12～1：修善寺～長岡～下田旅行
昭３	1928	大場姓へ改姓	
昭４	1929	國學院大學附属神道部講師　愛知県神職会講演「神社と考古学」	12：三島神社宝物調査
昭５	1930	『石上神宮宝物誌』「原始神道の考古学的考察」	２：三島神社宝物調査
昭９	1931	『日本考古学概説』『羽黒山古鏡図譜』「本邦上代の洞窟遺跡」	
昭 10	1935	「神道考古学の提唱と其の組織」「赤城山神蹟考」、学部講師	６：静岡浅間神社・伊豆山神社調査
昭 11	1936	**「官国幣社宝物物語」**「神道考古学の組織」	１：伊豆旅行（三島社・願成就院・伊豆山神社他）、5：三島徳倉反田遺跡調査見学・三島神社調査、６：三島神社宝物館
昭 12	1937	**『国幣小社伊豆山神社誌』**	
昭 13	1938	**「南豆洗田の祭祀遺蹟」**「甲斐国分寺・伊豆国分寺・飛騨国分寺」	１：洗田遺跡発掘調査
昭 14	1939	「上総菅生遺跡の一考察」「伊賀国南宮山麓の上代祭祀遺蹟」	
昭 15	1940	「信濃建国史の一考察」「神武天皇紀の一考察」	１：伊古奈比咩命神社史編纂嘱託、9：大倉集古館神道美術展覧会のため三島神社調査
昭 18	1943	『日本古文化序説』、『神道考古学論攷』、**『伊古奈比咩命神社』**	
昭 21	1946	神祇院を退職	
昭 22	1947	登呂遺跡の発掘調査	４・10：西伊豆神社調査（伊那下・舟寄・箕匂・国柱命・伊志夫） ７：伊那下神社調査、11：三島柏谷横穴調査見学・長岡丸山遺跡踏査
昭 23	1948	学位取得　『古代農村の復原』『日本考古学新講』	
昭 24	1949	國學院大學教授　『登呂』「信濃国安曇族の考古学的一考察」	
昭 25	1950	「考古学上から見た我が上代人の他界観念」	
昭 26	1951	「相模国府の位置について」「相模国分寺の性格」	７：伊東市内遺跡調査、12：山木遺跡見学
昭 27	1952	「東北地方の祭祀遺跡」『考古学ものがたり』「万葉集に表れた祭祀」	12：伊豆長岡遺跡調査
昭 28	1953	『千種』「万葉集の考古学的考察」「関東の経塚」	
昭 30	1955	『平出』『杉並区史』「下伊那の古墳時代文化」	
昭 31	1956	『信濃史料１（信濃考古綜覧）』『常陸鏡塚』	４～：伊東市史編集顧問
昭 32	1957	『上原』**「上代祭祀遺物の特質」**	５：長浜遺跡・姫宮遺跡見学
昭 33	1958	**『伊東市史』「筑摩の金冠」「伊豆多賀の祭祀遺跡」**	８：上多賀宮脇遺跡調査
昭 37	1962	『武蔵伊興』『日本考古学辞典』	
昭 39	1964	「神道考古学の体系」「上伊那郡箕輪町発見の祭祀遺跡」	10～：熱海市史顧問
昭 40	1965	『東京都遺跡目録』『武蔵野市史』「方形周溝墓」	
昭 41	1966	國學院大學に考古学専攻を設置　『信濃浅間古墳』『稲荷山経塚』	３：下多賀、６・７：初島：８：日金山経塚
昭 42	1967	**『まつり』**「歴史時代における「塚」の考古学的考察」	３：大仁・熱海　４：伊豆山　５：韮山
昭 43	1968	「奉納鏡から見た庶民信仰の一考察」	10：伊豆山調査
昭 44	1969	**『熱海市史』**『神坂峠』	11・12：松崎・熱海調査
昭 45	1970	定年・大学院客員教授、日本考古学協会委員長　『祭祀遺蹟』	２：下田市三穂ヶ崎・伊豆山神社調査
昭 46	1971	『常陸大生古墳群』『柴田常恵集』、『新版考古学講座』刊行開始	３：伊豆半島調査
昭 47	1972	『神道考古学講座』刊行開始	
昭 48	1973	『宇津木遺跡とその周辺』「菅生発見の「やまとごと」」	
昭 49	1974	『町田市史』「古氏族の移動と装飾古墳」	
昭 50	1975	著作集刊行開始、逝去　『考古学上から見た古氏族の研究』	８：姫宮遺跡調査 ２～：熱海市喜志中世墓調査

太字は伊豆関係の著作　下線は神道考古学形成上画期となった著作

（大場磐雄先生記念事業会 1975 による）

第１表　大場磐雄略年譜

族の研究』（1975c）をまとめている。これらの研究において、大場は考古学を中心としながらも、文献史学・民俗学などを積極的に応用し「ウェットな考古学」と評された（大場 1975a）。そうした研究方法が最も顕著に現れたのが「神道考古学」である。

本稿では、大場の「神道考古学」の形成過程を概観するとともに、伊豆での調査・研究の位置づけを図りたい。発表の便宜のため、あらかじめ筆者の理解する４段階区分を示しておく。

第１段階：石器時代研究の一環としての宗教思想研究や、民俗学的な研究の段階。

第２段階：「神社と考古学」の発表や三倉山との出会い以降、神社局に移り職務として神社調査を行う傍ら、精力的な祭祀遺跡の調査をはじめた段階。

第３段階：「神道考古学の提唱と其の組織」から「神道考古学の体系」に至る段階。特徴的な自然景観を対象とする祭祀遺跡の文献・民俗事例・考古資料３つの資料からの考察を研究の中心としたもので、「神道考古学」の真骨頂といえる。

第４段階：第３段階後半から晩年の古氏族研究に至る時期で、歴史時代の祭祀や、対象の不明瞭な集落内祭祀など、第３段階とは異なった資料の検討を行った段階。

２．神道考古学以前－民俗調査と石器時代宗教思想研究－

（１）伊豆大島の民俗調査

大場（当時は谷川姓）は國學院大學入学以前より鳥居龍蔵のもとで人類学・考古学を学んでいたが、入学後は前年に着任した折口信夫のもとで郷土研究会幹事として活躍する。ここで民俗学を学んだことは後の「神道考古学」の性格を決定付ける出来事であった。

1919（大正８）年には初の論考として「武蔵の巨人民潭」（谷川 1919）を発表するが、これは中学時代より関心を持っていた問題であった。以後「八俣遠呂智の伝説に就いて」「酉の市と簪について」など民俗学の分野の著述を発表している。これらは比較的身近な素材を扱ったものであるが、その後も、各地の調査で考古資料とともに民俗資料にも眼を配ることを怠らず、その研究日誌『楽石雑筆』に詳細な記述を残しているが、独立して発表されたものは少ない。

1925（大正 14）年 10 月、病気療養のため大島へ渡った谷川は２週間滞在し、年末～正月にも再び大島に渡る。この成果は翌年、「大島人の信仰」「伊豆大嶋の古代遺跡[1]」（1926a・b）として公表された。当時、渡島調査を行っていたのは鳥居龍蔵と石田収蔵の２人だけで、谷川のように計４週間の滞在は特筆されるのだが、ここでは前著に注目しておきたい。本論は御神火・神達ケ原の舞踊・地神様［第２図］・魔除・門松・開島伝承を載せており、加筆して最初の著書『民俗叢話』（1926d）に収められた。一見してわかるように信仰・儀礼に注目している。体系的なものではないが、その後の学問を考える上では重要な著述である[2]。

第２図　地神様（1925-26 年　ob0359）

（２）見高段間遺跡と石棒性格論

こうした中でも、谷川の中心的な関心は考古学（特に石器時代）にあった。大学を卒業後、第二横浜中学校[3]で教鞭をふるう一方、土偶・石棒などにトーテミズム、生殖器崇拝、呪物崇拝などの外来理論の適用を試みた石器時代宗教思想の研究（1922・26c）、諸磯式土器を伴う文化の総合的把握をめざした「諸磯式土器の研究」（1924・25）などの論文を精力的に執筆しており、また、そうした研究の基盤として関東近郊各地の踏査を行っていた。

1927（昭和２）年は大場にとって記念すべき年となった。見高段間遺跡の調査と『石器時代の住居阯』の出版、そして吉佐美洗田遺跡との出会いである。見高段間遺跡は、1925（大正 14）年に見高小学校（現河津町立東小学校）の敷地造成に伴い発見されたもので、校長土屋宗吾の配慮によって遺物が集められ、遺構もできる限り現状が維持された。既に後藤粛堂（1927）、足立鍬太郎・堀田美桜男（1927）、中谷治宇二郎（1927）が概要を報告していたが、後藤より知らせをうけた谷川は３月・４月・６月の３度にわたって現地調査を行った。当時としては例のない詳細な報告であり、柴田常恵の「石器時代住居阯概論」とあわせて『石器時代の住居阯（考古学研究録第１冊）』として刊行された（谷川 1927a）。谷川は 1925 年に内務省神社局考証課嘱託となったが、柴田は同じく内務省の地理課の嘱託であった。この後、谷川は柴田の指導のもと奈良県石上神宮の宝物調査に携わることとなる間柄である。

見高段間遺跡は縄文時代中期後半を中心とした集落遺跡で、竪穴の掘り込みは工事で失われていたものの「石畳」（敷石住居）や炉など４軒の住居と、凹んだ石を上部に載せた石棒を囲む配石遺構［第３図］などの遺構が検出された。谷川はそれらの遺構（一部復元）や出土遺物を３度にわけて実測・計測し報告書をまとめている。遺構編では「土器埋没」（埋甕）を含めて、それぞれの遺構について類例を挙げて比較した上で、その性格を検討している。また、遺物編の冒頭には石棒、ついで石鏃（黒曜石製）が挙げられており、敷石住居・配石遺構とともに、当地域の特徴として指摘している。また、同類の土器が大島・神津島・新島・三宅島にも存在することを指摘し、これら諸島の遺跡遺物が南豆からの一分派とみる見解も提示している[4]。この報告は単に一集落の報告書というだけでなく、敷石住居、埋甕、石棒、玉類などについては他遺跡の事例を集成してその性格を論じた研究書とみるべきものである。

第３図　段間遺跡配石遺構（復原：1927 年　ob0478）

なかでも祭祀・儀礼に関わる研究史上において注目されるのが石棒に関する記述である。谷川は前掲の宗教思想関係の論文の中で石棒＝生殖器崇拝説をとっていたが、本書において一転してこれを退け、上記の配石遺構については発火具説を提示する一方、遺物編においては宝器的な性格の可能性も論じた。ここには一貫して実用具説を採っていた共著者の柴田常恵の影響も考えられるのだが、柴田説に完全に従うわけではないことも両者の関係を窺う上で注目される（中村印刷中）[5]。

３．吉佐美洗田遺跡と神道考古学の成立

（１）「南豆に於ける特殊遺跡の研究」と初期の神道考古学

段間遺跡調査の前後、谷川は伊豆半島の各地を踏査しており、石器時代の分については「伊豆半島の遺跡遺物」として公表されている（1927c）[(6)]。

この間、最初の調査では下田の遠国嶼などにも足を伸ばしている。遠国嶼は土師器・須恵器が多数出土した８世紀の祭祀遺跡であり、既に足立鍬太郎（足立・堀田 1927）や柴田常恵の調査が行われていた。当時の研究日誌『楽石雑筆』には、近世以降に石畳上の坩が神体であったこと、遺物の出土状況の奇異なこと、手捏土器が多く、多くが木の葉を付すもので日用品とみられないことなどから「宗教上の遺跡」とし、「当時古代の自然崇拝によってこの島が全体崇敬せられ居り、その頂上に神霊の鎮祭を信じ、奉斎の具として土器、陶器を奉納せるものなるべし（中略）自然崇拝の対象として見るをやや妥当なる如し。神体が土器なりしことは石棒その他が神体なりしことより考えて可能性あり。石畳はあるいは古代磐座の遺形ならんか」との所見が残されている（大場 1975b：272-273 頁）。こうした土器を祭祀用とすること、これが自然崇拝に起因すること、石畳を磐座と想定すること、といった見解が既にまとまっていたことを示す貴重な資料である。翌日には田牛小学校を訪れ、遠国嶼［第４図］や洗田遺跡の遺物［第５図］を調査している。

第４図　遠国嶼出土遺物（1927 年　ob0535）

第５図　洗田遺跡出土遺物（1927 年　ob0539）

見高の二度目の調査の際には、洗田遺跡を訪れ小発掘を試みている。洗田遺跡は前年に加藤勝信ら地元青年団による発掘で土製勾玉・土製模造鏡等が出土し、これを受けて地元バス会社社長の鈴木吉兵衛も発掘を行っていた。鈴木は私邸を「武山閣」と称して仏像や出土品を多数陳列しており、谷川の南豆調査を強く支援した人物である。谷川は一回目の調査でそれらの出土品を見学し、強い興味を抱いていた。４月 12 日、現地を訪れ、「つらつら思うにここは古代の祭址なり。これと似たる例各地にあり、かつ余はその西方にそびゆる三倉山を崇拝せしに非ずかと推測す」と感想を記している（同：278 頁）[(7)]。

この前年、谷川は宮地直一の代筆で『考古学講座』の１編として『神社と考古学』を著していた（宮地 1926）。石器時代の宗教的遺跡遺物、原史時代の宗教思想、有史期の神像・神饌・建築等を概説したものである。原史時代については、『記紀』における土器・剣・鏡・玉などの宗教的意義を

掲げるとともに、明器として石製模造品・土製模造品を紹介し、さらに、古典記載の「石」や樹木名を社名に持つ神社や、武蔵立石・鹿島要石、あるいは神社の神木などの現在の実例を挙げて石崇拝や樹木崇拝などの自然崇拝の存在を指摘している。既に古典文献と民俗事例（現存の神社での事例）を主要な根拠とする「神道考古学」の方法が現れているものの、この段階では、谷川自身が直接調査を行っていないこともあって、対応すべき考古資料についてはあまり触れられていない。

これに対し、洗田遺跡の報告として著された「南豆に於ける特殊遺跡の研究」（1927b）は、手捏土器・土製模造品・石製模造品[8]の考察を中心としており、『神社と考古学』の弱点を補強したものとなった。大和三輪山の神（高橋・西崎 1920）、安房東長田（大野 1900）、丹後大宮売神社（魚澄・梅原 1923）など 17 遺跡を示し、「ａ封土の無い事、ｂ往々特殊設備を設けたものの存する事、ｃ神社と関係ある事」という共通点を挙げ、梅原末治や柴田常恵（1924）、森本六爾（1926）、後藤守一（1926）らに従って、これらを「宗教関係遺跡（祭祀関係址）」とする。ここで学史を振り返ると、模造品については大野延太郎が東長田例を神事上の儀式に関わるものと想定したものの、その後、石製模造品を体系的に研究した高橋健自（高橋 1919、高橋・西崎 1920）が全て古墳出土のものとし、磐座と考えられる大石を伴う三輪山の神の事例も古墳の崩れたものとしていた。これに対し、後藤や森本は伴出した鏡の検討の中で祭祀址の可能性を指摘し、梅原は神社境内遺跡である大宮売神社例の考察においてこれを「宗教的意味を有する」遺跡とした。柴田も概説書中はじめて「祭祀阯」の項目を立て、模造品出土遺跡を列挙して非実用品としての性格を論じていた。これらの先行研究により、模造品＝祭祀遺物との認識が形成されていたのである。

谷川はさらに続けて、土器を用いた祭祀や、底部の木葉文に関わる柏の葉、あるいは石製品が古墳からも祭祀遺跡からも出土することについて、古典の記述から検討を加えている。三倉山が祭祀の対象になったことは推定しているものの、その点は前面には出ておらず、議論の中心は模造品にあった。そして、模造品が非日常的な遺物であること（葬送の場である古墳からも出土する）、それを祭祀に用いることが古典に記述されていること、それらが神社境内周辺からも出土することを祭祀遺跡としての根拠にあてたのである。この論旨は、『神道講座』の１編として執筆された「原始神道の考古学的考察」（1930・1931）に引き継がれている。

（２）「神道考古学」の成立と洗田遺跡の再調査

この後、大場は精力的に各地の祭祀遺跡・巨石群などの調査を進める。1933・1934（昭和８・９）年には文部省精神文化奨励資金を受け、長野県雨境峠、千葉県東長田などを調査しており、1935（昭和 10）年に「神道考古学の提唱と其の組織」（1935a）、翌年に「神道考古学の組織」（1936）を発表する。これは第一篇を神霊篇とし、御神霊・御霊代等神霊憑依の物体として山岳・樹木・巌石・池沼等、鏡・剣・玉等、神像・神符・守札等を挙げるとともに、祭祀遺跡・遺物を第二篇祭祀篇に置くものである[9]。ここにおいて、祭祀対象のあり方を主要な論点とする方向性が示されることとなる。こうした視点での具体的研究が上記の２論文と前後して発表された「池中の鏡」「峠神の一考察」「赤城山神蹟考」「原始神社の考古学的一考察」（1935b・c・d・1937）といった論考である。いずれも、特徴的な自然景観に対する古典での祭祀の記載例や現在まで続く信仰を紹介したのち、そこか

第６図　洗田遺跡調査風景（1938 年　ob1164）

第７図　走湯神社（1938 年　ob1163）

ら鏡・玉・模造品などが出土する事例を挙げるもので、以後の大場の「神道考古学」の基本的スタイルがここに示されている。

こうした中、佐藤民雄・江藤千萬樹・長田實・壬生忠臣らが洗田遺跡を発掘した。その成果を踏まえて大場らは 1938（昭和 13）年、再び洗田遺跡の発掘を行うとともに、三倉山や式内伊豆奈比咩神社に擬される山麓の走湯神社の調査などを実施した［第６図・第７図］[10]。

その成果は「南豆洗田の祭祀遺蹟」（大場・佐藤・江藤 1938）として公表され、考察においてはまず三倉山について記述され、三輪山などの「神奈備式霊山」の一例と位置づけている。遺物の考察は前回同様古典の記述を参照したものであるが、最後に、所在地が賀茂郡であること、神奈備式霊山の存在、遺物が三輪山の神出土品と類似する点などから賀茂氏族の東方移住を論じている。以後、三倉山－式内伊豆奈比咩神社－洗田遺跡のセットは、その有力な類例として扱われることとなる（大場 1948b・1961）。

（３）伊豆の神社調査と島神祭祀

ところで、当時大場は、本職であった内務省神社局考証課嘱託の立場で『石上神宮宝物誌』『箱根神社大系』『羽黒山古鏡図譜』『官幣大社鹿島神宮宝物図鑑』『官幣大社香取神宮宝物図鑑』など官国幣社級の宝物誌の編纂のほか、昇格を希望する神社の神社誌編纂なども手がけている。伊豆半島においても三島大社（三島市）、伊豆山神社（熱海市）、伊古奈比咩命神社（下田市）、伊那下神社（松崎町）[11]の調査を行っている。三島大社については宝物館の陳列に従事し、前後して「官国幣社宝物物語」に宝物を紹介している（1938）。伊豆山神社に関しては、同じくその宝物を紹介するほか、『国幣小社伊豆山神社』の小冊子を著し、それらの中で信仰の根源を日金山と走湯に求めるとともに、平安期に遡る経塚の重要性を指摘している（1937b・c）。伊古奈比咩命神社は三島神の后神で伊豆有数の古社であるが、資料編付きの『伊古奈比咩命神社』（1943）を編集している。そこでは『三宅記』にみる伊豆諸島造島伝承や三宅島からの遷座伝承、あるいは火達山での御幣流し神事とそこでの土器の出土などにも触れており、半島と諸島との関係を窺う上で重要である。また、「伊那下神社」（1965）においては、伊豆の式内社の社名を、造島活動にちなむ神名を冠するもの、加茂などの

訂正：伊豆奈比咩神社は伊豆奈比咩命神社の誤り

第８図　牛原山（1946 年　ob1864）

第９図　亥ノ子石（1938 年　ob1871）

氏族名を冠するもの、地名を冠するものの３種にわけ、後者に属する本社を土地の霊を祭ったものとし、具体的には、その信仰の対象を背後の牛原山と亥ノ子石とみている［第８図・第９図］。

大場は学位論文において島嶼信仰をまとめ、後に「神道考古学の体系（以下、「体系」と略す）」において「沖津島型」と「三嶋型」に分類する（1964）。前者は宗像沖ノ島や伊勢神島、瀬戸内海の高嶋・荒神島・大飛島など海上交通の安全を祈る普遍的な存在であるのに対し、「三嶋型」は伊豆諸島の造島活動を背景としたもので、厳島を加えているものの、ほぼ伊豆に限定された特徴的な類型である。その具体例として挙げているのが洗田調査の前年に佐藤民雄・長田實（1937）によって報告された夷子島である。自身が調査した遠国嶼と同様に手捏土器が特徴的であり、この地が三宅島を中心とする伊豆諸島を望む好適地であることを指摘し、伊古奈比咩命神社における火達山の事例を参照している。

神道考古学においてもっとも中心におかれたのは古墳時代の祭祀遺跡であるが、伊豆においては中世・近世の祭祀遺跡にもみるべきものが多いということを考えると、上記の神社調査の持つ意義は大きい。後述のように「体系」では、祭祀遺跡を対象に応じて「神奈備型」「浅間型」「立石型」「飯石型」などに類型化しているが、それぞれ基本的には列島各地に分布する普遍性を備えているのに対し、「三嶋型」のみ地域性の強い類型となっていることは注目されるべき点であろう。なお、遠国嶼については諸島の遥拝とともに漂着神の可能性が指摘されている。

（４）「神道考古学」の円熟と上多賀宮脇遺跡

昭和 23 年、折口信夫のすすめで、「祭祀遺跡の研究」を提出、文学博士の学位を取得し、翌年國學院大學教授に就任する。学位論文全体の公表は還暦まで待たねばならなかったが、その骨格は「神道考古学の体系」（1964）として公表され、また部分的に分割されて直後より公表されていく（1948b など）。第 10 図のように「Ａ１　自然物を対象とする遺跡」が詳細に分類されており、この部分が特に重視されていることがわかる。古典文献での記述と現存する民俗事例を挙げ、同様の場からの考古資料の出土をもって、信仰の継続を説くのである。注目すべきは「Ｃ　遺物の発見されないもの」の存在であり、鹿島神宮要石などを挙げている。前述した伊那下神社もここに含まれる。

訂正：還暦は古稀の誤り

昭和 30 年代、大場は『伊東市史』・『熱海市史』の顧問を引き受ける。『伊東市史』（1958a）では、伊豆半島の祭祀遺跡 11 箇所を挙げ[12]、山を対象とするもの（上多賀－向山、丸山－熊谷山、洗田－三倉山、下条－吸光山、いずれも神奈備型）、海を対象とするもの（長浜、遠国嶼、火達山、夷子島）とする。姫宮については後述する。また、式内社や来宮信仰についても触れており、樹霊信仰ではなく漂着神信仰と位置づけている。

1958（昭和 33）年には小野真一の斡旋で熱海市多賀神社境内の宮脇遺跡の発掘調査を行った。多賀神社は式内白波之弥奈阿和命神社にも擬され、背後に神奈備型の向山［第 11 図］、本殿裏には神木である欅、磐座と想定される岩［第 12 図］と原始信仰の対象が揃っている。加えて、漂着神伝承に基づく神社から海岸への神輿渡御の民俗信仰が注目された。前年の『伊東市史』での来宮信仰の考察を踏まえ、漂着神の目印として向山や磐座を位置づけた。この考察は『神社新報』に速報し（1958b）、『熱海市史』に詳細を述べているが（1969）、山・木・石・海という４大要素の揃う例として、また、考古学と民俗学の交差の例として『日本民俗学大系』所収の「考古学と民俗学Ⅱ」（1960）にも紹介している。

【祭祀遺跡】
A　遺跡を主とするもの（祭祀の対象の明らかなもの）
1　自然物を対象とする遺跡
山　岳　浅間型（富士型）・・・・・・・・高山や火山のように遠方から畏怖崇敬するもの
神奈備型（三輪型）・・・・・・集落に接近し、親愛の念をこめてまつるもの
巌　石　石神　立石型・・・・・・・・・・・・高く聳立するもの
飯石型・・・・・・・・・・・・盤居するもの
磐座　要石型・・・・・・・・・・・・小形の自然石を対象とするもの
像石型・・・・・・・・・・・・一種の紋理や特別な形状を有するもの
樹　木　（湛木型）・・・・・・・・・・・・（神木に対するもの）
水　霊　鏡ヶ池型・・・・・・・・・・・・鏡を投入するもの
養老型・・・・・・・・・・・・延命長寿の信仰をもつ池泉・温泉
沖津宮型・・・・・・・・・・・・海中の島嶼（航海安全を祈願）
三嶋型・・・・・・・・・・・・群島への信仰（伊豆諸島など）
2　古社の境内及び関係地
3　墳　墓
4　住居跡
B　遺物を主とするもの（祭祀の対象の不明なもの）
1　祭祀遺物の単独発見地
2　子持勾玉発見地
3　土馬発見地
C　遺物の発見されないもの

【祭祀遺物】
石製品（滑石製模造品、子持勾玉）
土製品（粗造小形土器、土製模造品、土馬）
金属製品（銅鏡、鉄器、鉄製模造品）

第 10 図　「神道考古学の体系」における祭祀遺跡・遺物の分類
（大場 1964 をもとに模式化）

４．残された問題－歴史時代祭祀遺跡の体系、集落内祭祀遺跡、祭祀の歴史的背景－

さて、「体系」において具体的に触れなれなかった問題として、歴史時代における祭祀遺跡の体系化、集落内祭祀遺跡、祭祀の歴史的背景の問題がある。

最初の問題については、「体系」の翌年、「歴史考古学上における祭祀遺跡」（1965）を発表し、「A 前代継承の遺蹟（１自然物対象、２土馬発見地）、B 仏教習合の遺蹟（１神宮寺・別当寺跡、２修法遺蹟、３経塚、４塚（山伏塚・行人塚等））、C その他」に区分し、伊豆山をＢ３経塚に位置づけ、Ｃの例として、東京都の総合調査で知られた伊豆諸島の積石を挙げている。この他にも熊野、日光などの各論を発表していることから大場自身の問題としては概ね決着しているといってよいだろう。

一方、「体系」において分類に加えられなかったのが、いわゆる集落内祭祀遺跡である。伊豆における集落内祭祀遺跡の代表例である日詰遺跡、日野遺跡は大場の存命中には知られていなかったが、

訂正：神南備は神奈備の誤り、上多賀神社は多賀神社の誤り

第 11 図　港より向山を望む（1956 年　VI-20-8）

第 12 図　磐座からの鏡出土（1956 年　VI-10-5）

河津町姫宮遺跡（式内佐々原比咩命神社旧境内地）は 1957（昭和 32）年、地方史研究所主催で倉田芳郎・加藤晋平らによって発掘調査が行われ、当時は住居址の検出はなされなかったが、日常什器と小形土器が出土し、祭祀に密接な関係を持つ住居の跡として報告された（倉田・加藤 1958）。大場は同年５月遺跡を訪れており、『伊東市史』では近くの小山を対象とする可能性にも触れつつ、神籬を立てて神まつりをした可能性を指摘している（1958a）。1957 年 9 月、國學院大學考古学研究室では東京都足立区の伊興遺跡の発掘を行った。大場（1962）は祭祀遺物集中地点に関してはその位置関係から水霊を奉祀したもの想定したものの、住居出土例については個人的祭祀の存在を指摘するのみで祭祀の性格等については論じていない。同様に「体系」においても「Ａ４住居跡」として狛江和泉遺跡や伊興遺跡などを挙げているものの、具体的な検討は殆どなされなかった。

祭祀の歴史的背景の問題については、既に、1935 年の段階で洗田遺跡における賀茂氏東方移住の問題が提起されているほか、「体系」以前の 1952（昭和 27）年に、東北地方の祭祀遺跡の数が中部・近畿と肩を並べることに注目し、その要因を東北開発における中央文化の波及に求める「東北地方の祭祀遺跡」（1952）を発表している。しかし、学位論文や、「体系」においては祭祀遺跡の諸類型は全国的に普遍的なものとして説かれ、その地域差や成因については殆ど触れられていない。この問題はその後、上総二子塚、常陸鏡塚、常陸大生古墳群などの古墳研究の中で古氏族研究として進められていき、祭祀遺跡・古墳を含めた総合的な考察が試みられているものの[13]、「体系」での言及はわずかであった。

「体系」を到達点とする大場の「神道考古学」は、古典や現存の神社・民俗信仰に残る事例を出発点とし、それに適合する考古資料を扱うことで成り立ってきた。こうした姿勢からは現存の信仰が考古学的にどこまで遡るか、という問題に重点が置かれていたことが窺える。従って、後年の神社神道と直接関わらない祭祀・儀礼については方法論上検討することが困難である[14]。ここで挙げた対象の不明瞭な祭祀遺跡や、祭祀の歴史的背景といった問題は、そうした目的や方法論とは次元を異にした問題であり、改めて方法論を組み立てていくことが必要とされよう。

本稿はオープンリサーチセンター整備事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」のうち「國學院の学術資産にみるモノと心」プロジェクトの成果の一部である。掲載写真は本学学術フロンティア推進事業の成果および同プロジェクトで調査を進めている大場磐雄旧蔵資料（國學院大學学術資料館所蔵）を用いた。撮影年の後の記号はその資料番号である。なお、執筆にあたり廣木健太郎の協力を得た。

註

１）谷川は約４週間滞在し、龍ノ口遺跡の知られた経緯を紹介するとともに、龍ノ口、王ノ上、島庁付近、野増小学校付近、センバ崎、アハイ等の各時代の遺跡と遺物を紹介し、伊豆半島での遺跡の分布が西海岸に偏ることから、そこから諸島へ移住したのであろうこと、あるいは伊豆諸島に須恵器の存在が知られていないことなどを考察している。

２）大場は各地を調査する際、祭礼や民俗にも注意を払って日誌『楽石雑筆』に記載しているが、独立して公表されたものは少ない。

３）第二横浜中学校は谷川が赴任した翌年（1923）に「横浜第二中学校」と改称している。現在の横浜翠嵐高等学校。

４）この問題は既に「伊豆大島の古代遺跡」において検討しており、見高報告と同年に発表された「伊豆半島の遺蹟遺物」においても、その関係性の検討が調査課題となっていたと述べている。

５）この石棒を中心とする配石遺構については、足立・堀田や中谷と同様、谷川も楽石雑筆に記すように、報告書執筆段階まで生殖器崇拝に関わるものと考えていた。

６）以降の報告を納めた下編は何らかの事情で発表されてない。

７）谷川はこの時点では、字名を宮尾と誤っていたが、本稿では洗田で統一する。

８）石製模造品は洗田では出土していないが、古墳以外の模造品出土遺跡が類例として集成された。

９）第一篇　神霊並びにその奉斎に関するもの
　第一　御神霊・御霊代等神霊憑依の物体（山岳・樹木・巌石・池沼等、鏡・剣・玉等、神像・神符・守札等）
　第二　神霊奉斎の設備（磯城・神籬・磐境・神奈備・三室等、社殿、神輿・厨子等）
　第三　殿内の装飾・調度品等
第二篇　祭祀篇
　第一　祭祀関係（祭祀遺跡遺物、幣物・祭器、神饌等）
　第二　祀官関係（服装・持物等）
第三篇　崇敬篇

10）1928 年の調査時の写真については、山添奈苗（2007）による紹介がある。

11）伊那下神社誌は 1946（昭和 21）年に脱稿していたが刊行されず、地方史研究所による伊豆南西海岸の報告書ではじめて公表された。

12）伊東市竹ノ台、同宇佐美、熱海市上多賀、沼津市長浜、長岡町丸山、南伊豆町下条、朝日村遠国嶼、同洗田、下田町夷子島、同火達山、下河津村姫宮（地名は当時のもの）。長浜と姫宮は昭和 32 年に踏査を行っている（大場磐雄先生記念事業会 1975）。

13）これらの報告書の考察は、「東北地方の祭祀遺蹟」を含め最晩年に『考古学上から見た古氏族の研究』（大場 1975c）にまとめられた。

14）戦後、大場が縄文時代の配石遺構を祭祀の場として積極的に位置づけた一方、土偶・石棒などについては殆ど触れることが無かったのは、前者は石信仰としての系譜がたどれる一方、後者はそうした現在の神社信仰からは隔絶していることによると思われる（中村印刷中）。

引用文献

足立鍬太郎・堀田美櫻男 1927「南豆の遺蹟遺物につきて」『静岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第３集：1-18 頁、静岡県（静岡）

魚澄惣五郎・梅原末治 1923「大宮売神社」『京都府史蹟勝地調査会報告』第 5 冊：81-87 頁、京都府（京都）

大野延太郎 1900「安房国安房郡東長田村遺跡ニ付テ」『東京人類学会雑誌』第 15 巻第 167 号：186-192 頁、東京人類学会（東京）

大場磐雄 1930・1931「原始神道の考古学的考察（一～三）」『神道講座』第 9 冊、第 10 冊、第 12 冊：111-128 頁、149-162 頁、183-196 頁、神道攷究会（東京）

大場磐雄 1935a「神道考古学の提唱と其の組織」『神社協会雑誌』第 34 年第 1 巻：6-9 頁、神社協会出版部（東京）

大場磐雄 1935b「峠神の一考察」『上代文化』第 13 号：20-27 頁、國學院大學上代文化研究会（東京）

大場磐雄 1935c「池中の鏡（一・二）」『歴史公論』第 4 巻第８号、第 9 号：116-123 頁、110-120 頁、雄山閣（東京）

大場磐雄 1935d「赤城山神蹟考（其の一・二）」『考古学雑誌』第 25 巻第 11 号、第 12 号：1-20 頁、11-35 頁、聚精堂（東京）

大場磐雄 1936「神道考古学の組織」『皇国時報』第 615 号：8-9 頁、皇國時報発行所（東京）

大場磐雄 1937a「原始神社の考古学的一考察」『歴史公論』第 6 巻第 1 号：303-321 頁、雄山閣、（東京）

大場磐雄 1937b「官国幣社宝物物語　国幣小社伊豆山神社」『神社協会雑誌』第 36 年第 1 号：17-25 頁、神社協会出版部（東京）

大場磐雄 1937c『 国幣小社伊豆山神社誌』伊豆權現講社本部（熱海）

大場磐雄 1938「官国幣社宝物々語（七）　官幣大社三島神社」『神社協会雑誌』第 37 年第 3 号：38-44 頁、神社協会出版部（東京）

大場磐雄・佐藤民雄・江藤千萬樹 1938「南豆洗田の祭祀遺蹟」『考古学雑誌』第 28 巻第 3 号：176-211 頁、吉川弘文館（東京）

大場磐雄 1943a『伊古奈比咩命神社』伊古奈比咩命神社（静岡）

大場磐雄 1943b『神道考古学論攻』葦牙書房（東京）

大場磐雄 1948a「祭祀遺蹟の研究」國學院大學学位論文（1970『祭祀遺蹟』角川書店所収）

大場磐雄 1948b『日本に於ける山岳信仰の考古学的考察』神社新報社（東京）

大場磐雄 1952「東北地方の祭祀遺跡（上・下）」『古代』第 4 号、第 5 号：1-11 頁、14-24 頁、早稲田大

学考古学会（東京）
大場磐雄 1958a「古代第 2 章第 3 節　祭祀遺跡」「同第 4 章　古代伊豆の諸相」『伊東市史』167-177・202-227 頁、伊東市教育委員会（伊東）
大場磐雄 1958b「伊豆多賀の祭祀遺跡（上・下）」『神社新報』第 595 号・第 596 号、神社新報社（東京）
大場磐雄 1960a「考古学と民俗学Ⅱ」『日本民俗学大系』1：233-244 頁、平凡社（東京）
大場磐雄 1960b「神道考古学生立ちの記」『具体例による歴史研究法』：242-247 頁、吉川弘文館（東京）
大場磐雄 1961「春日大社の考古学的考察」『春日大社・興福寺』42-56 頁、近畿日本鉄道（大阪）
大場磐雄 1962「祭祀遺跡の考察」『武蔵伊興』國學院大學考古学研究報告第 2 冊：65-106 頁、綜芸舎（東京）
大場磐雄 1964「神道考古学の体系」『國體論纂』下巻：29-53 頁、國學院大學（東京）
大場磐雄 1965a「歴史考古学上における祭祀遺跡」『石田博士頌寿記念東洋史論叢』：127-143 頁、石田博士古稀記念事業会（東京）
大場磐雄 1965b「伊那下神社」『伊豆南西海岸』：395-445 頁、地方史研究所（東京）
大場磐雄 1967『まつり』学生社（東京）
大場磐雄 1969「古代第 2 章　祭祀遺跡」『熱海市史』上巻：95-119 頁、熱海市（熱海）
大場磐雄 1970『祭祀遺蹟－神道考古学の基礎的研究－』角川書店（東京）
大場磐雄 1975a「原田先生をしのぶ」『考古学雑誌』第 60 巻 4 号：80-90 頁、日本考古学会（東京）
大場磐雄 1975b『大場磐雄著作集』第６巻、雄山閣出版（東京）
大場磐雄 1975c『考古学上から見た古氏族の研究』永井出版企画（東京）
大場磐雄先生記念事業会　1975　『楽石大場磐雄先生略年譜并著作論文目録』（東京）
倉田芳郎・加藤晋平 1958「下河津南小学校校庭遺跡」『伊豆河津郷－下河津－』：23-52 頁、地方史研究所（東京）
國學院大學日本文化研究所学術フロンティア推進事業「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」プロジェクト 2005・2006『大場磐雄博士写真資料目録Ⅰ・Ⅱ』國學院大學日本文化研究所（東京）
後藤守一 1926「磯城郡三輪町大字馬場山の神」『漢式鏡』：390-391 頁、雄山閣（東京）
後藤粛堂 1927「考古学上富士山下民族分布論に就いて（下）」『中央史壇』第 13 巻第 5 号：75-87 頁、国史講習会（東京）
佐藤民雄・長田　實 1937「南豆夷子島の古代祭祀遺跡」『上代文化』第 15 号：76-82 頁、國學院大學上代文化研究会（東京）
柴田常恵 1924「祭祀阯」『日本考古学』国史講習録第 19 巻：76-78 頁、国史講習会（東京）
高橋健自 1919『古墳発見石製模造器具の研究』帝室博物館学報第 1 冊（東京）
高橋健自・西崎辰之助 1920「三輪町大字馬場山の神古墳」『奈良県史蹟勝地調査会報告書』第７回：34-52 頁、奈良県（奈良）
谷川磐雄 1919「武蔵の巨人民潭」『武蔵野』第 2 巻第 3 号：34-38 頁、武蔵野会（東京）
谷川磐雄 1922「石器時代宗教思想の一端（一～三）」『考古学雑誌』第 13 巻第 4 号、第 5 号、第 8 号：28-33 頁、27-35 頁、22-30 頁、聚精堂（東京）

谷川磐雄 1924「諸磯式土器の研究（一～三）」『考古学雑誌』第 14 巻第 9 号・第 11 号・第 15 巻第 1 号：38-43 頁、23-33 頁、26-50 頁、聚精堂（東京）

谷川磐雄 1925「武蔵国橘樹郡箕輪貝塚発掘報告（一～三）　（諸磯式土器の研究四・五）」『考古学雑誌』第 15 巻第 3 号、第 15 巻第 9 号、第 16 巻第 4 号：44-49 頁、6-31 頁、1-23 頁、聚精堂（東京）

谷川磐雄 1926a「大島人の信仰」『神社協会雑誌』第 25 年第 3 号：39-44 頁、神社協会（東京）

谷川磐雄 1926b「伊豆大島の古代遺跡」『史蹟名勝天然紀念物』第 1 集第 3 号：77-8 頁、史蹟名勝天然紀念物保存協会（東京）

谷川磐雄 1926c「土偶に関する二三の考察」『國學院雑誌』33-5：48-57 頁、國學院大學（東京）

谷川磐雄 1926d『民俗叢話』坂本書店（東京）

谷川磐雄 1927a「南豆見高石器時代住居阯の研究」『考古学研究録第一輯　石器時代の住居阯』雄山閣

谷川磐雄 1927b「南豆に於ける特殊遺跡の研究（上・中・下）」『中央史壇』第 13 巻第 6 号、7 号・8 号：65-74、61-72、74-92 頁、国史講習会（東京）

谷川磐雄 1927c「伊豆半島の遺蹟遺物（上・中）」『史跡名勝天然紀念物』第 2 集第 11 号、第 12 号：6-14 頁、9-17 頁、史蹟名勝天然紀念物保存協会（東京）

中村耕作　印刷中「大場磐雄の縄文時代精神文化研究－「石器時代宗教思想」研究から「縄文人の信仰儀礼」研究へ－」『祭祀考古学』第 7 号：祭祀考古学会（東京）

中谷治宇二郎 1927「南伊豆に於ける考古学的資料」『人類学雑誌』第 42 巻第 4 号：135-146 頁、東京人類学会（東京）

宮地直一 1926『神社と考古学』考古学講座、雄山閣（東京）（実見したのは 1929 版）

森本六爾 1926「二三鏡鑑の新例について」『考古学雑誌』第 16 巻第 5 号：39-48 頁、吉川弘文館（東京）

山添奈苗 2007「下田市洗田遺跡と三倉山の画像資料－大場磐雄、昭和 13 年 1 月－」『國學院大學日本文化研究所共同プロジェクト研究報告　人文科学と画像資料研究』第 4 集：101-105 頁、國學院大學日本文化研究所（東京）

フォーラム終了後下記調査・文献の遺漏に気づいた。

谷川磐雄 1927「二三の土製多重塔に就いて」『考古学雑誌』第 17 巻第 2 号：●頁、●